

嫁♂

〜ヨメオトコ〜



嫁 ♂

〜ヨメオトコ〜



作：流右京
ジャンル：BLラブコメ

第一話 突然の嫁の宣言

ここは天望学園の屋上。鳴海秋彦(なるみ あきひこ)は今まさに人生最大のピンチに陥っていた。

「あの、さっきの…なんだけど」

「やっぱり冗談…だよな?」

「…冗談?」

秋彦の目の前には、容姿の整った少年がいた。

「だったら、もう一度言う!」

少年はふんぞり返ると大声で言い放った。

「俺は…お前の嫁だ!」

それは朝のホームルームで転入生がやって来るとい話だった。

秋彦はまだ寝ぼけ眼を擦りながら2年B組の自席に座った。

「おい、それってマジ!」

「マジだって!しかもすっぱいケメンらしいぜ?」

天望学園は県内唯一の男子校だ。しかし、この時期に転入生が来ることは珍しい。周りは朝からその話題で持ちきりだった。

(ふーん…転入生ね。ま、僕には関係ない話だけど…)

秋彦はクイツと大きな丸眼鏡を掛け直すとその話を冷静に聞いていた。鳴海秋彦は特にこれといって特徴も無い普通の少年だ。もうすぐ誕生日を迎える以外、特に何もない日常。

大人しい性格も相まってクラスメイトにも苗字しか覚えられていない。学校生活も大して変わり映えも無い。だから、今日来る転入生も勝手に注目を浴びて、勝手に友達が増山出来て、自分には気付きもせず卒業していくんだろうとボーッと考えていた。

——始業のベルが鳴った。途端に慌ただしく周りが着席している。先生がガラツと扉を開ける。着席が間に合わなかった何人かの生徒を叱りつけたあと、名簿を開いた。

「さて、ここで転入生を紹介します。鳴海獅子(なるみ れお)君」
先生が名簿の名前を確認しながら転入生を教室に招き入れた。
(鳴海?僕と同じ苗字なんだ…) そう思った矢先だった。

……その瞬間、教室中がざわめいた。赤と黒の髪に制服の上からでも分かるほど鍛えあげられた肉体、それでもスラリとしていて端正な顔立ちも少年の魅力を引き立てていた。全員の視線が転入生に食い気味に集まる。勿論それは秋彦も例外ではなく、思わず見惚れてしまう程だった。

「……………」

先生が黒板に少年の名前を書いている間、少年は誰かを探すように生徒一人一人を確認し、それは秋彦と目が合った時だった。

「……アキ!」

(……へ?え?え?)

一瞬、少年が自分の名前を呼んだように聞こえた。その時、少年の名前を書き終えた先生が少年の肩を叩いた。

「鳴海獅子君は、その鳴海秋彦君の知り合いだそうだよ」

…いきなり何の話をしているんだ?秋彦がそう思った時だ。

「……先生、少し説明不足です」

少年はそう言う。先生のチョークを奪い、黒板に向かって何かを書き始めた。そして、その文字を見た瞬間、全員が凍りついた。「よろしくお願ひします」

少年は礼儀正しくお辞儀をした。しかし、皆すでに黒板に書かれた文字しか目に入っていなかった。

《俺は秋彦の嫁だ!》誰がどう見ても、ハッキリと書いてあった。



鳴海獅子 なるみけお



第2話 傍若無人な嫁

次の瞬間、全員が秋彦を見た。

(ヒイ!?)

レオが黒板に書いた突拍子もない言葉。秋彦はその好奇と侮蔑が入り混じった視線に耐えられず硬直した。先生は慌てて黒板に掛かれた文字をざっと消すと、レオに着席を促した。

「ええっと、レオ君? とりあえず空いている席に座って:」

…と、先生が言い終わる前に、レオはスタスタと秋彦の左隣に座っていた生徒に近づいた。

「おい、お前」

「え……? な、何だよ」

レオは凄まじい眼力で生徒を睨み付け、静かに言い放った。

「俺はこの席に座りたい。代わってくれないか?」

「え……? いやでも、ここ俺の席だし……」

「た・の・む!!」

「はっはい、いいっ!」

生徒はあまりの迫力に圧倒され、そそくさと自分の荷物をまとめると逃げるようにレオが座るはずだった席へと移動した。

ドカッ! レオは満足げな顔を見ると、豪快な音と共に空いた席へと着席した。

「んな……なな……!？」

一連の出来事をポカンと見ていた秋彦は未だに事態を飲み込めていなかった。シンと静まり返った教室内、困惑の顔だった先生が突然、白目をむきながら言い放った。

「せ、先生……ちよつと胃薬を飲んでくるので……。自習にします……」
先生は青ざめた顔でヨロヨロと教室を出て行った。

……無理もない。自分のクラスの転入生がいきなり傍若無人な振る舞いをし出したのだから胃薬くらい飲みたくもなるだろう。しかしもう一人、胃薬を飲みたい人物がいた。

「なあなあ! お前からどういふ関係?」

「おい、嫁って何なんだ!？」

(ううう……つ、何でこんな事に……!?)

秋彦は胃がもたれそうになるほど注目の的になっていた。

「どういふ関係? さっき書いたとおりだ。俺はアキの……」

「れ、レオ君! ちよつといいかな!？」

続く言葉を遮るように耐えられなくなった秋彦がレオの腕を掴むとそのままグイグイと教室の外へと引つ張っていった。

「おお! リアル逃避行かよ! 熱いね〜! お二人さん!」

他の男子達の冷やかしの声も無視して、秋彦はレオを連れて大急ぎで屋上への階段を駆け上がった。



第3話 嫁の告白

「あのさ、ああいう事されると困るんだけど！」

「困る？何故だ？」

「授業が始まったばかりの校舎の屋上から二人の声が響いた。」

「だ、だからあ！よ、嫁とか言われても意味分らないし……」

「……問題ない。俺はお前の嫁として相応しくなれるよう、古今東西ありとあらゆる花嫁修業を積んできたからな」

「修行……？いや、そもそもなんで僕の『嫁』なの？友達になり

たいとかならまだ理解出来るけど……」

「友達？」

「だって僕たちまだ初対面だし、いきなり告白とか……」

そう、秋彦にとってレオはさつき会ったばかりのはずだ。

なのに何故コイツはあんな事を黒板に書いたのだろうか？

「ああ、問題ない。何故なら俺達は既に出会っているからな」

「へ……？」

いきなり、レオの口から出た言葉に秋彦は耳を疑った。

既に出会っている？僕とコイツが？

「加えて言うなら、先に俺にアプローチしたのはお前だ」

「はあ!？」

「……どうやら、アキは俺を覚えていないようだな」

「だが問題はない。俺はあの日の事を忘れていないし、何より俺はアキの嫁になる事だけを目標に生きてきた」

「あ、あの日……？」

この少年、レオと秋彦の間に一体何があつたというのだろうか？ここまで一途に慕うからには相当な理由があるはずだ。しかし、秋彦にはどうにも思い当たる節が見つからなかった。

「誤解がないように言っておく。俺は男が好きとか、女が好きとかそういう意味でお前に告白した訳じゃない。俺の目的はアキに俺を嫁として認めてもらおう事だ。その為なら、何でもしてみせる！」

「な、何でそこまで……？」

「何度も言っただろう？アキの嫁になる為だ」

そこまで言つて、レオはポンと手を叩いた。

「ああ、そうか。やつと理解した」

「へ？何が……？」

「嫁たるもの、常に夫を立てないと。忠告、感謝するぜ。アキ」
レオは勝手に感動に包まれながら秋彦に深々と頭を下げた。

(全つつ然！何も分かつてないし！)

「もういい！勝手にしろ！」

これ以上の議論は平行線と判断した秋彦はレオに罵声を浴びせながら下へ降りる扉へと向かった。

「アキ、これだけは忘れないでくれ」

不意にレオが呼び止めた。

「な、何だよ!？」

「俺はあの日のアキとの思い出を絶対に忘れない。たとえ何があつても、だ」

「……ああそう。勝手にすれば？」

秋彦は生返事で返すと、階段を駆け下りて行つた。

「アキ……」



第4話 嫁の大暴走

2時限目が始まった。始業のチャイムと共に皆席に着いた。勿論、秋彦とレオも自分の席に着席していたが周囲の視線は二人に釘付けだった。

（集中だ。授業だけに集中すればアイツなんか忘れられる！）
秋彦は隣に座っているレオに目もくれず前の黒板に書かれていく文字をひたすら見つめていた。この時、秋彦は気付かなかったが、レオは明らかに不機嫌な様子だった。

「……………」

それはレオと秋彦の間にある机の距離。天望学園は一人一人、机の感覚がある程度空いている。それは勿論カンニングや私語の防止の観点からも有効な対策だ。しかし、レオにとっては秋彦と引き離された気分だった。

「じゃあ、次は誰か音読して下さい。教科書32ページの……………」

「……………先生、問題があります」

「ん？突然どうしたのかね？」

いきなりスツと手を挙げたレオに驚く先生。今度は周囲の視線が一気にレオに集まった。

「教科書がまだ届いていないので授業の内容が理解できません」
「あ、ああそうか。それは確かに問題だよね？ええつと、どうしたのか……………先生の教科書もこれ一冊だけだし……………」

先生は少し考えたあと、レオに声を掛けた。

「ふむ、仕方ないね。レオ君、隣の人に見せて貰いなさい」

「……………了解です」

レオはコクリと頷くと、ガタつと席を立った。

「じゃあ、葉山君？悪いけどレオ君に教科書見せてあげ……………」
先生はレオの左隣に座っていた生徒に声を掛けようとした。

次の瞬間。

ドガガアアア

教室中に爆音が響いた。

「ぎゃあああつ!?!」

面食らったのは秋彦だ。凄まじい突風と共にレオがさながら暴走列車のごとく秋彦めがけて机ごと突っ込んできたのだ。

「……………教科書、見せてくれ。アキ」

「お……………お前なあ〜?!」

先生が気付いた時には二人の机の連結が完了していた。嘩然とする周囲などお構いなしに、レオは満足げな様子だった。

「え……………ええつと。授業…再開しようか……………」

先生は青ざめた顔で授業を再開したが、また胃薬が必要になりそうだ。

ン!!



嫁



夫

洛陽樹